

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日運輸省特別郵便承認第六二七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一日発行)  
平成十八年五月一日発行(第百九十九号第五卷)

# ホトトギス

五月号



## 俳句随想

汀子

朝日俳壇担当者へ一通の葉書の抗議文が届いた。「前略。一月九日付朝日俳壇の稲畑汀子さんが選ばれたへタクシーの予約のとれぬ雪の朝」の俳句は当り前といえば余りに当り前と思ひますがいかがでしょう。雪の朝はタクシーなど予約は不可能です。小さな発見、焦点の面白さなど全く感じません。俳句をはじめてたった三年数カ月の私がこんなことを言うのは潜越と思ひながらもとても疑問に思ひました。後略……」という町田市的女性からのものであつた。三年余り俳句に親しんできた方には、共感を呼ぶというより当り前の事としてしまふのであろうか。雪の朝はタクシーの予約が取れないと断定する人があるかも知れないが、我々の住んでいる芦屋は雪の朝でもタクシーの予約はとれる。しかし取りにくい状態になることは確かである。何とか予約を入れたい時の焦りが作者の心情として読者に伝わってくる句である。自分の生活の範囲の中での理解と解釈しか出来ないのは選者として失格であり、広い視野と作者の心を読み取らなければ良い選者とは言えない。平明な句と平凡な句を見抜いて選べるようになるためには沢山の人の心に触れて相手の立場に立つて理解する心がなければならぬ。

旬日記 汀子

平成十七年五月一日 東海ホトギス俳句大会

遅桜名残の雨をいざなへる

二日目の帰路の残花はいかならん

五月五日 関西野分会

旅衣身軽に夏へ入りにけり

雨止みて庭に立夏の風渡る

五月五日 下萌句会

牡丹の庭に季節のどどまらず

連絡の鰯船は子供の日に及ぶ

もう雨をいとはぬ終の牡丹かな

五月七日 悼 佐藤伸葉様

信濃路の縁を謝して偲ぶ夏

五月七日 芦屋ホトギス会

東京へ雨は移りぬ若楓

育つもの立夏の雨の上りけり

これよりの旅路を思ふ初鰯

先づ机辺片づけてより更衣

五月八日 ロイヤル吟行会

軽暖を脱ぎてロビーに入りけり

若葉より若葉へ渡る水の音

名苑のすぐ剪る藤の花手入

名苑といへる涼しき峽路あり

五月十日 大阪倶楽部

松蟬を聞けば山路と思ひけり

みよし野に掘りし葉草葉の日

軽暖といへど不安の出先かな

安心の薄暑の旅でありしかな

石楠花に室生寺の旅恋ふこと

五月十日 綿業倶楽部

牡丹の花の行方は追はざりし  
青空に雲は過客よ鯉幟  
肩の荷を下るせしに似て牡丹散  
咲き替る手入のありて庭牡丹  
牡丹に家居のおごりありにけり

五月十二日 清交社

桐の花見えて迷はず着きしこと

桐の予報魁けて降る桐の花

計画は破算母の日なりけり

桐の花活けて仔細を問ふことも

気にかかると稿債一つ夏霞

結局は富士を見ぬ旅夏霞

五月十三日 工業倶楽部

青天に放り出されし根切虫

又旅の日々はじまりぬ芥子の花

祭好き江戸つじの血の騒ぐとや

五月十四日 四国ホトギス同人会

緑蔭の葉ずれの音にある月日

木洩日の吹かる音と老鶯と

記憶よび起せよ渡る涼風よ

若き日の記憶重ねて緑蔭に

この森の追憶夏の旅心

象頭山万緑深き裾を曳く

大日除下りてロビーの午後となる

五月十五日 四国ホトギス俳句大会

女木島の毛虫の記憶甦る

五月十六日 悼 更谷芳川様

お月をいただきしこと偲ぶ夏

五月十七日 有恒倶楽部

更衣今日は出先に迷ふなく

薪能般若の芝の雨の鰯船

祭髪足先までも弾みをり

新緑の森抜けて来し青空に

祭笛通ひて空へ届きけり

新緑に酔ひたるや道迷ひけり

ふと時間忘れてをりぬ祭町  
祭には行きたく留守居頼まれて

五月十八日 夏潮句会

旅に出る八十八夜過ぎし頃

すぐ止んで卯の花腐つ雨ならず

はじまりし五月雨傘の忘れもの

梅雨前に犬のシャンプーすることに

又降つて筍梅雨でありしかな

香りより存在となる朴の花

原稿に向ふ八十八夜かな

五月十八日 悼 辻本斐山様

放談も淋しくなりぬ若葉雨

五月十九日 クラブ台同

老鶯に山風の吹き渡りけり

一日の旅の疲れを持ちつつ端居

五月二十日 ホトギス社吟行会

残されし古き看板路地薄暑

雨予報しりぞけて行く涼しさよ

五月二十六日 きざらぎ会

予報にも薄暑の旅路心して

みよし野の踊草のをどる雨

快晴といふがいざなふ薄暑かな

余花を見て来し旅話尽くるなく

軽暖の歩を旅一步より起す

五月二十七日 時雨会

若葉冷かこつ朝の旅立に

峰若葉光残にして雨上る

滞在の若葉に濡れをりし日々

五月二十八日 句会と講演の会

豆飯や家の一日なりしこと

豆飯のわが家に帰り来しことを

豆御飯炊きて一人でありにけり

五月二十九日 野分会  
着迷ふも楽しみのうち夏に入る  
滞在は旅の自由よ夏に入る

# 廣太郎句帳

廣太郎

初夏や乾ききつたるビルの影

五月十七日 草木瓜会

ソナタめく蛸蚪の二列でありにけり  
川風を緑に染めてゆく日差

而して都心色濃く夏来る

花束は女性のみとや聖五月

雨が来て風が来て夏来りけり

祝賀会終へ薫風の座に集ふ

亀鳴くや類句恐れぬ心もて

松蟬を抱へ込んだる林かな

五月二十二日 ホトトギス社吟行会

五月四日 一水会

関の声とも松蟬の森揺るる

近未来都市に変貌街薄暑

若葉風トランペットの音連れて

戦乱を遠くに聞いて夏来る

新緑や芭蕉と未来繋ぐ都市

五月八日 伝統俳句協会千葉県部会

日出づる国春蟬に囀されて

夏めくやいつまで続くタイガース

二時間といふ新緑の鉄路かな

五月十八日 登高会

五月二十四日 若水会

新緑の寺は自然と語り合ふ

牡丹の崩れんとする気品かな

祭髪結び徳川の裔であり

水打つて本山の朝動き初む

海亀に天与の涙ありにけり

卯浪寄す大和の時代近づけて

受付に君の涼しき会積かな

日の牡丹星のぼたん語り継ぎ

祭好き下町好きで銀座ママ

五月九日 朝日カルチャー若草句会

紅に暮れてぼうたん崩れ初む

太陽を拒む角度に藤咲けり

初夏の風纏ひ葬列去りにけり

神々を鼓に招き薪能

藤棚を使ひ切つたる花の嵩

航跡は初夏の長さでありにけり

五月十九日 蕉心会

五月二十八日 ホトトギス社吟行会

五月十二日 土筆会

雀逃げ鯉は寄り来る苑涼し

河内弁涼しく季題語らるる

初夏や様変りせし芝公園

名苑を塗替へてゆく青嵐

芍薬のやうに和服を召されしか

初夏の寺東京タワー従へて

蟻踏まぬやうに上れば芭蕉の目

# 雑詠

## 廣太郎 選

月を上げ星を沈めて山眠る 神戸 山田弘子  
 焼諸を買ふオリオンの真下にて 同  
 焼諸に俳論矛を納めけり 同  
 短日の富士全容を惜みなく 長岡 安原 葉  
 会へばすぐ雪はいかがと又問はれ 同  
 マスクして帰路は人目を忍ぶ仲 同  
 内庭に鴨の群れなす池配し 福岡 松尾緑富  
 四五枚の菖蒲田それも枯れ切つて 同  
 すでに散りそめし枝広げ冬桜 同  
 日向ぼこよき岩選び番鴨 姫路 桑田青虎  
 雪虫のまぎるとなく日矢の射す 同  
 顔ぶれの揃ひしことに年惜む 同  
 初富士を近所のものとして住める 熱海 嶋田一步  
 初富士を見てカルパッチョパスタ食べ 同  
 初富士を見てルノールシャガール見 同  
 がらくたを捨てし安らぎ春支度 同 嶋田摩耶子  
 大声の人へ大声御慶述べ 同  
 風よりも日射し優勢冬桜 同

梟の檻に哲学者の眼 狛江 大津立子  
 囚はれの身の梟に虚空のみ 同  
 森すでに冬芽の点りそめにけり 同  
 長者眉いよよ達磨に初鏡 平戸 辻 是心  
 頭を剃つて常の如くに初鏡 同  
 去年今年なき隨身の杖と笠 同  
 水亭の障子が返す紅葉晴 たつの 浅井青陽子  
 すすき揺れ法のみ山の書写山路 同  
 わが家にも主婦のつれづれ吊し柿 同  
 初鏡お前も老けたなと思ふ 大阪 薦 三郎  
 白菜といふは巻き込む立てこもる 同  
 暖房と書き暖房と書きなほす 同  
 地に影を正しく描き枯木立 高崎 吉村ひさ志  
 三年を生きて三年日記買ふ 同  
 変りたる街に変わらず社会鍋 同  
 無言てふ無限のことば身にぞ入む 神戸 長山あや  
 むかしむかし小春日和の父の膝 同  
 太陽のごとてのひらに柚子ひとつ 同  
 人を見る眼が初鴨でありにけり 同  
 風のなき空に風あり冬桜 相模原 木村享史  
 山眠るガードレールに縛られて 同  
 おでん食べ性悪説を説く女 東京 坊城俊樹  
 凶々しきがんも居座るおでんかな 同  
 ちやんちやんこ眠たき犬が着てをりぬ 同

## 雑詠句評（四月号より）

暮潮・雅・純也

小木菟・一步・ひさ志

昭代・基子・弘子

比奈夫・仁義・廣太郎

### 雪吊のゆるがせならぬ縄加減 福岡 松尾緑富

雪吊はいうまでもなく、降雪で庭木などの枝が折れぬように、一本の支柱から縄や針金を八方に張り渡し枝を吊ることである。その作業を作者は見ている。私のような雪の少ない地方の人間から見れば、珍しい、雪国に來た甲斐のある見物だが、その地方の人達にとっては、大切な庭木が雪で折れないようにし、美しい景色を保つためのまことに重要な仕事であろう。

雪吊の仕事を目前にした作者には、これからの長い冬の雪に耐えるようにする心くばりが、縄の渡し方とか吊る力加減とかに、特に感じられたのであろう。そのことを叙することによって、おのずから雪吊の美しさに思いを至らせる仕組みになっているところに凡ならざる手腕、力量を感じる。（暮潮）

東京でも公園などでは季節になると「雪吊」が、由緒ある松などに設えてある事が多い。見事なまでに一本一本ぴんと張られた綱は芸術品のように見えるが、雪国ではこの張りがその木にとっては正に命綱のようなものであろう。実用性と、芸術性が不思議な一体感を伴って詠まれている。（廣太郎）

### 水平線揺るがせ三浦大根抜く 東京 内藤呈念

背景は一本の水平線、大根を抜く人は一人という構図がくつきりと浮かび上がる。青首大根の倍以上の重さがある三浦大根は、中程が膨れていて首の部分が細くくびれている。形状や重さを考えると、抜く時の一気に加える力が、青首大根等の場合とはかなり違うのであろう。三浦大根を抜く人ならではの動きに注目したのが、じつと見続けた作者の句の仕上げだったと思われる。三浦半島の快晴の穏やかな日で、中間の光景は全て省略されている。大根を抜くと言う身近な動作が、遙か沖の大景延いては大自然を揺るがしていると感ずる視点が驚かされる。視点を何処に置くかによってこんなにも一句を奥深いものにしてしまうものなのだと感じさせられた御句。（雅）

今や日本の代表的な野菜と言ってもよい大根は種類も多く、名前から見ても大型のものが多い。その中でも神奈川県三浦半島の名産としても知られた「三浦大根」も大型である。句もこの地での情景であろうが、ダイナミックに大根を收穫している姿が雄々しく伝わってくる。（廣太郎）（以下略）

# 天地有情

# 女子選

ちやんちゃんこ着れば余生の始まれる  
 マロニエの落葉を踏めば空はパリ  
 西の賀に時雨彩るものとして  
 熊手買ふ声の躍つてをりにけり  
 雪国のいよよ霰るる夕かな  
 舞ひ込みし栄誉も称ふクリスマス  
 病抜け初夢よりはうつゝよし  
 今年こそ趣味極め度し寝正月  
 先人に思ひを致す雑煮かな  
 動き初む浪速の街も松の内  
 避寒てふ言葉羨しき書簡読む  
 庭焚火果ててさびしくなりにけり  
 初笑せる石仏とおもひ見る  
 春の海光り輝きやまざらん  
 霜月の静かに急ぐ庭工事  
 堪能をせし庭落葉一掃し  
 寒月が眩しいと戸を閉めにけり  
 卒寿我寝正月には非ざりし

神戸 長山あや  
 同 稲畑廣太郎  
 東京 同  
 長岡 安原 葉  
 同 同  
 東大阪 東野一彌  
 同 同  
 同 東野太美子  
 同 同  
 同 同  
 榎原 稲岡 長  
 同 同  
 明石 中杉隆世  
 同 同  
 神戸 山田弘子  
 同 同  
 豊中 瀧 青佳  
 同 同

雪女舞ひて夜毎の月もなき  
 滞在のホテルに馴れて大晦日  
 歳末の室津如何にと降り立ちて  
 一本の冬ざくらなり皆仰ぐ  
 初春の形見となりし一軸に  
 紅白の寒牡丹に偲びては  
 浜離宮松の雪吊つぶさに見  
 浜離宮今も尚ある鴨寄せ場  
 紅葉散る森の底には人形壳  
 爺ふたり甘味処へ着膨れて  
 星の里雪の褥となりけり  
 風のかたち木木のかたちに雪降り  
 落つる日に燃ゆる色あり藍の花  
 土手よりも低き日輪藍の花  
 雪無尽蔵なれば俳句も無尽蔵  
 竹箒青々として年行くか  
 聖夜来る耶蘇に傾きゆくころ  
 暖炉燃え女あるじとなりし友

東京 今井千鶴子  
 同 同  
 たつの 浅井青陽子  
 同 同  
 同 同  
 姫路 桑田青虎  
 同 同  
 福岡 松尾緑富  
 同 同  
 東京 坊城俊樹  
 同 同  
 大阪 佐土井智津子  
 同 同  
 徳島 上崎暮潮  
 同 同  
 熊本 岩岡中正  
 同 同  
 静岡 鷲巣ふじ子  
 同 同

# 天地有情句評

汀子

病抜け初夢よりはうつゝよし 東大阪 東野一彌

初夢より現実が良いとは吉。

先人に思ひを致す雑煮かな 東大阪 東野太美子

先人の智恵を思い改まる心で雑煮を祝う作者。

避寒てふ言葉羨しき書簡読む 樞原 稲岡 長

寒さに耐えて恪勤に働く我が身には及ばぬ避寒という魅力。

春の海光り輝きやまざらん 明石 中杉隆世

春の海という表現から受ける明るさと光の輝きへの思い。

堪能をせし庭落葉一掃し 神戸 山田弘子

落葉の見事さとそれを一掃した清々しさの対比。

マロニエの落葉を踏めば空はパリ 神戸 長山あや

マロニエの大きな落葉を踏んで仰ぐ空をパリと感じる感性。

西の賀に時雨彩るものとして 東京 稲畑廣太郎

関西ホトトギス祝賀会に降った時雨も彩りと見た雰囲気。

雪国のいよよ震るる夕かな 長岡 安原 葉

雪国といわれるだけあって震もいよよ盛んになる夕刻。